

はじめに

中世土器研究は、京都を中心に行われてきた。その理由は、京都以外のところから中世土器がほとんど出土しなかったことによる。そしてその差異は、ミヤコと地方、都市と鄙というような感覚で少なからず理解されてきた。

ところが八〇年代に入ると、鎌倉からも大量の一三世紀以降の土器が出土することが知られ、その後平泉も類似した状況であることが判明してくる。しかし一世紀の土器に関しては、依然として京都以外には存在しないという状況が続いていた。この事象を考古学は、「土器は儀礼用の器すなわち儀器になり、京都以外ではそれを伴う儀礼が行われなくなったうえ、日常饗膳具が腐敗しやすい木製品に移行したためだ」と解釈していた。

この考えは、現在でも概ね間違っていない。ところが二〇〇〇年代に入ると、秋田県では、官衙の終末から一世紀まで続く土器群が発見され、また岩手県では、一〇世紀から一四世紀までの土器が、切れ目なく編年できるまでに至っている。列島の中では、京都と北東北だけに認められる特異な様相である。

一世紀に北東北で起きた他地域にはない大事件としては、前九年・後三年合戦が挙げられるが、秋田県と岩手県で発見されている一世紀の土器は、堀などに囲まれた両合戦の関連遺跡から出土したものである。「つわもの」たちが集結したこれらの合戦と土器が、深いつながりを持つていたことは、容易に想像される。

このように北東北では合戦に伴って土器が用いられているが、京都では平穏であったにもかかわらず土器は継続

的に使われていた。すなわち京都と北東北では、土器に課せられた意味が微妙に異なるとしか考えられないのである。

また、制作技術にも相違が認められる。岩手県の土器をみてみると、鎮守府胆沢城跡の終末の土器が判然としな
いものの、それらに続く国見山廃寺跡や鳥海柵跡、そして平泉遺跡群の土器によって、その変遷は明確である。胆
沢城跡では、ロクロ大型坏のみの段階からロクロ大小坏へと変化し、その後にはロクロ大腕小皿、平泉段階になつて
ロクロ大小坏から、ロクロ大小皿と手づくね技法の導入によって手づくね大小皿となる。平泉藤原氏滅亡後も一定
期間、手づくね大小皿は生き続けるが、一三世紀中ごろには姿を消し、一四世紀前半にはロクロ大小皿もなくなる。
鎌倉も一二世紀後半からロクロ・手づくね大小皿を使い始めるが、一三世紀前半に手づくね大小皿は消滅し、ロ
クロ大小皿のみとなってゆく。鎌倉と平泉が共通するのは、やがて手づくねが消滅することと、それぞれを一步外
に出ると、土器はほとんど見つかからないという様相である。

対して京都も周辺から土器がほとんど見つかからないことは同様だが、一貫して手づくね土器を使い続けていくと
いう特徴を有する。ゆえに手づくね技法は、京都からの影響によつてもたらされたことは明らかなのであるが、考
古学はここで大きな誤認をしてしまっていた。

考古学の原点は観察であり、土器はその最初の対象ともいえるものである。しかしながら中央から地方へという
一つの文化の流れに感化され、手づくね土器の詳細な観察を怠つた結果、すべての手づくね土器は京都と同様に変
化している、という錯覚に囚われてしまっていた。

平泉の手づくねかわらけは、京都の一部の研究者からは一三世紀のものである、と評価されている。京都の編年
に照らし合わせれば、これは正しい。しかし京都と同様に平泉の土器が変化している保証は、手づくねという技法

以外には一つもないし、何よりも京都産の手づくね土器は、平泉では皆無であり、鎌倉にもない。さらに鎌倉の三世紀中葉の消滅寸前の手づくね土器は、京都では確認できない形態へと変化している。

このように土器の制作技法一つをとっても、伝播の様相は非常に複雑であることが、基本ともいえる観察によって見えてきた。さらには中世土器の分布から、土器の持つ意味を考えることも可能となっている。

本書では、武蔵大学の高橋一樹さん、NPO法人鎌倉考古学研究所の齋木秀雄さんとともに、京都ではなく東国から、土器から見える中世社会とはどのようなものだったのかを形にしてみた。冒頭にも書いたとおり、中世土器研究は京都から始まったが、中世前期土器の出土量は、これまでの調査によつて鎌倉と平泉を筆頭に東国に圧倒的に多いことから、今回の議論が行えるようになったのは、もはや偶然ではない。本書における各地区からの土器の報告や焼成窯の集成を見ても、京都に匹敵する研究段階となっている。

京都の権威を巧に利用して力を蓄え成長し、やがて貴族から政権を奪った武士たちのごとく、東国から中世土器の実態、その意味について表すことは、列島規模において土器とは何かを真摯に考えることにつながるはずである。以後、もつとも単純な土器から、複雑な中世社会を検討する議論が、各地で起こることを期待したい。

二〇一六年盛夏

八重樫忠郎

目次

3章 交通体系と土器の社会史……………42

- 1 土器が出土しない意味 42
- 2 平泉・河越・鎌倉 44
- 3 交通路の重要性 48
- 4 土器のもつ社会性 53

第1部 座談 土器らかわと中世武士論

1章 東北・関東の土器と武士……………8

- 1 鎌倉で頼朝期の土器が出た 8
- 2 土器の基本を知る 13
- 3 一二世紀の関東と東北 17

4章 文化の読みかえと技術の伝播……………60

- 1 土器と折敷の読みかえ 60
- 2 神仏も経塚も都合よく 67
- 3 土器の色と窯の作り方 72
- 4 四面庇建物と土器のセット 76

2章 荘園・公領の徴税権と土器……………24

- 1 土器の宴がもつ役割 24
- 2 都下りの官人・武士と地方行政 33
- 3 紛争回避と序列づくり 37

5章 土器が語る武士の実像……………80

- 1 土器の変化と時代性 80
- 2 国をまたぐ独自のルールづくり 87
- 3 土器の分布を読む 91
- 4 土器と武士の「一揆」 96
- 5 西国・大宰府との比較 100

はじめに ——— 八重樫忠郎 1

第Ⅱ部 関東・東北の土器

鎌倉の土器

飯村 均 106

はじめに 106

1 「鎌倉の土器」研究 107

2 大倉幕府周辺遺跡の一括資料 109

3 一括遺物の年代 113

おわりに 116

伊豆韮山と相模の土器

池谷初恵 140

はじめに 140

1 北伊豆地域の土器 141

2 相模国の土器 151

おわりに 163

武蔵・下野の土器

水口由紀子 166

はじめに 166

1 北武蔵の手づくね土器 168

2 南武蔵の手づくね土器 174

3 下野の手づくね土器 176

4 一二〜一三世紀の手づくねの特徴 179

おわりに 186

陸奥・出羽の土器

井上雅孝 188

はじめに 188

1 陸奥の一一世紀の土器 188

2 出羽の一一世紀の土器 193

3 一一世紀末葉の土器群 195

4 一二世紀の土器群 197

おわりに 211

東北地方の土器焼成窯

及川真紀 214

はじめに 214

- 1 白鳥館遺跡の窯跡 214
2 東北地方の土器焼成窯 224
おわりに 232

中世かわらけ資料と

東国の武士論・権力論

——高橋一樹

235

執筆者一覧

あとがき